

3. 光化学オキシダント (Ox)

平成 14 年度の光化学オキシダントの有効測定局数は、1,195 局（一般局：1,168 局、自排局：27 局）であった。

このうち、環境基準達成局数は、一般局と自排局で 6 局（0.5%）と依然として低い水準となっている（図 3-1）。

また、平成 14 年度における光化学オキシダント注意報等の発令延べ日数（都道府県単位での発令日の全国合計値）は 184 日であり、特に千葉県では 18 年ぶりに光化学オキシダント警報が発令された（図 3-2）。濃度別の測定時間の割合で見ると、1 時間値が 0.06ppm 以下の割合は 94.5%、0.06ppm を超え 0.12ppm 未満の割合は 5.4%、0.12ppm 以上の割合は 0.1% となっており、ほとんどの測定時間において環境基準値以下であった（図 3-3）。

一方、年平均値については近年漸増している（図 3-4）。また、大都市に限らず都市周辺部での光化学オキシダント濃度が 0.12ppm 以上となる日数も多くなっており、光化学大気汚染の特徴である広域的な汚染傾向が認められる（図 3-5）。

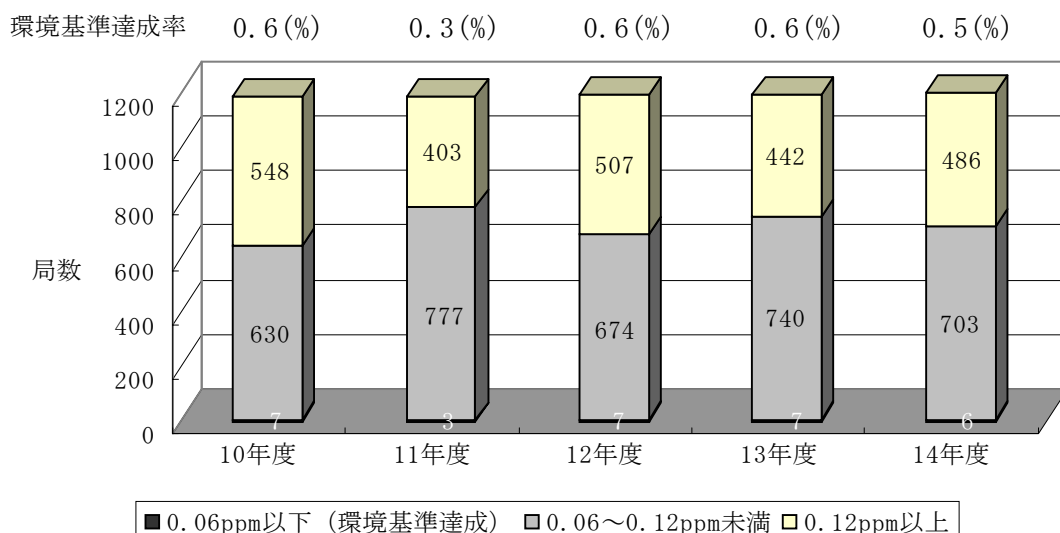


図 3-1 光化学オキシダント（1 時間値の最高値）濃度レベル別測定局数の推移

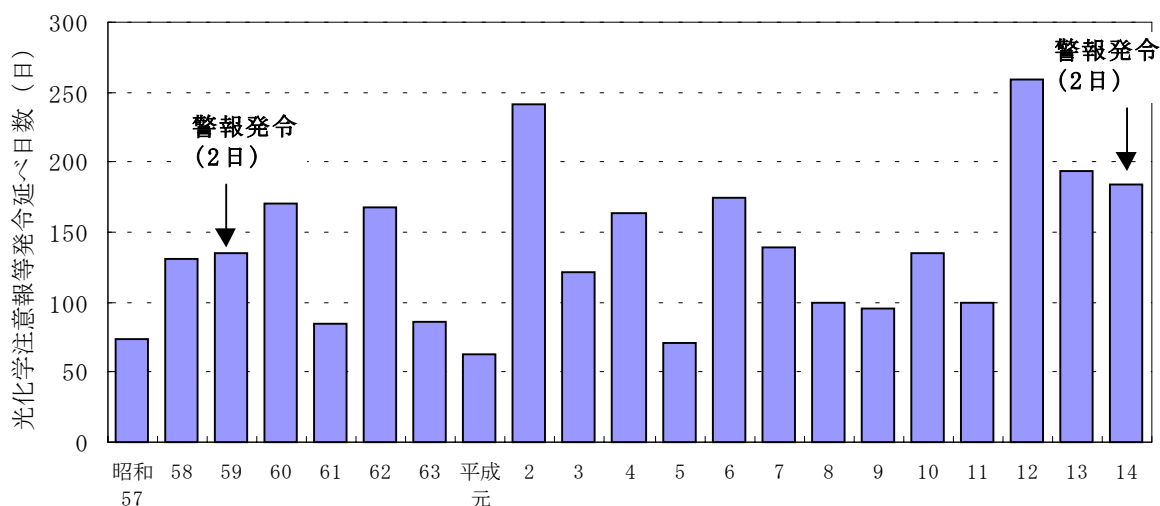


図 3-2 光化学オキシダント注意報等発令日数の推移

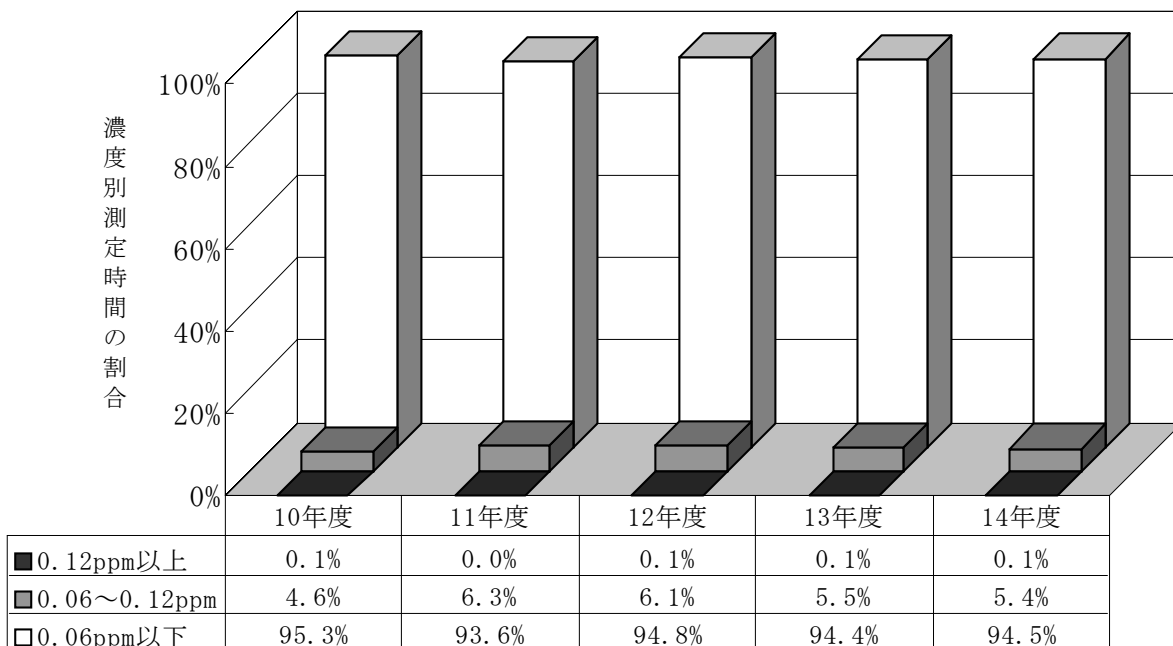
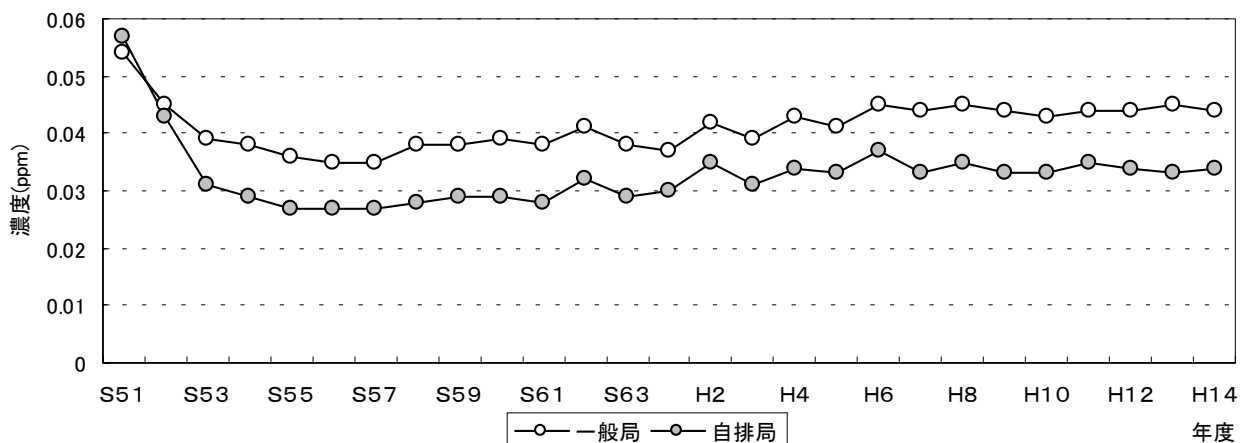


図3-3 光化学オキシダント濃度レベル別測定時間割合の推移（昼間）

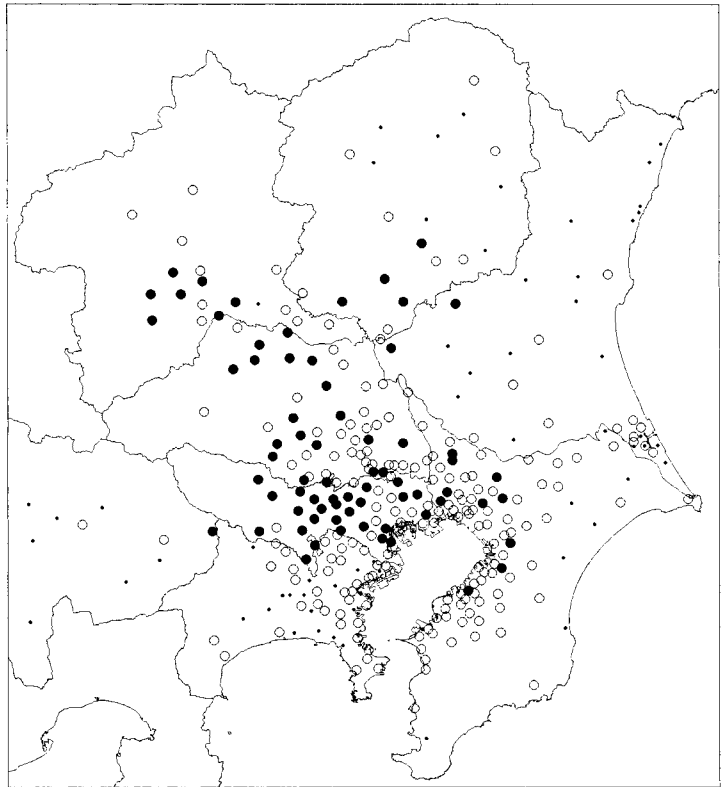


		S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61
一般局	年平均	0.054	0.045	0.039	0.038	0.036	0.035	0.035	0.038	0.038	0.039	0.038
	局数	699	755	833	898	952	982	1003	1021	1021	1024	1027
自排局	年平均	0.057	0.043	0.031	0.029	0.027	0.027	0.027	0.028	0.029	0.029	0.028
	局数	64	60	53	53	48	48	49	49	48	46	44
		S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9
一般局	年平均	0.041	0.038	0.037	0.042	0.039	0.043	0.041	0.045	0.044	0.045	0.044
	局数	1025	1035	1044	1056	1063	1094	1111	1120	1134	1142	1139
自排局	年平均	0.032	0.029	0.03	0.035	0.031	0.034	0.033	0.037	0.033	0.035	0.033
	局数	46	43	42	39	39	38	39	39	38	39	38
		H10	H11	H12	H13	H14						
一般局	年平均	0.043	0.044	0.044	0.045	0.044						
	局数	1150	1149	1158	1160	1168						
自排局	年平均	0.033	0.035	0.034	0.033	0.034						
	局数	35	34	30	29	27						

図3-4 光化学オキシダントの昼間の日最高1時間値の年平均値の推移

関東地域

- : 出現日数が10日以上の測定局
- : 出現日数が1日から9日までの範囲にある測定局
- ・ : 出現日数が無かった測定局



関西地域

- : 出現日数が10日以上の測定局
- : 出現日数が1日から9日までの範囲にある測定局
- ・ : 日数が無かった測定局

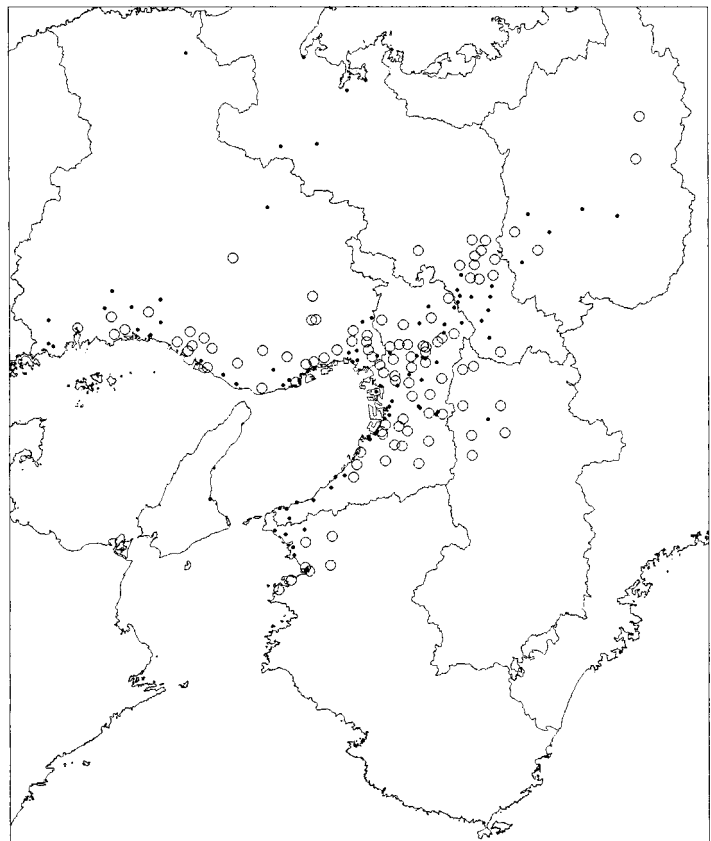


図3-5 注意報レベル(0.12ppm以上)の濃度が出現した日数の分布(関東地域、関西地域)

(参考) 非メタン炭化水素 (NMHC, Non Methan Hydro Carbon)

光化学オキシダントの原因物質の一つである非メタン炭化水素(全炭化水素から光化学反応性を無視できるメタンを除いたもの)の午前6時～9時における年平均値は、近年横這いからゆるやかな改善傾向を示しており、平成14年度は一般局では0.22ppmC、自排局では0.31ppmCであった(図3-6)。

大気環境指針：午前6時～9時の平均値が0.20～0.31ppmC以下

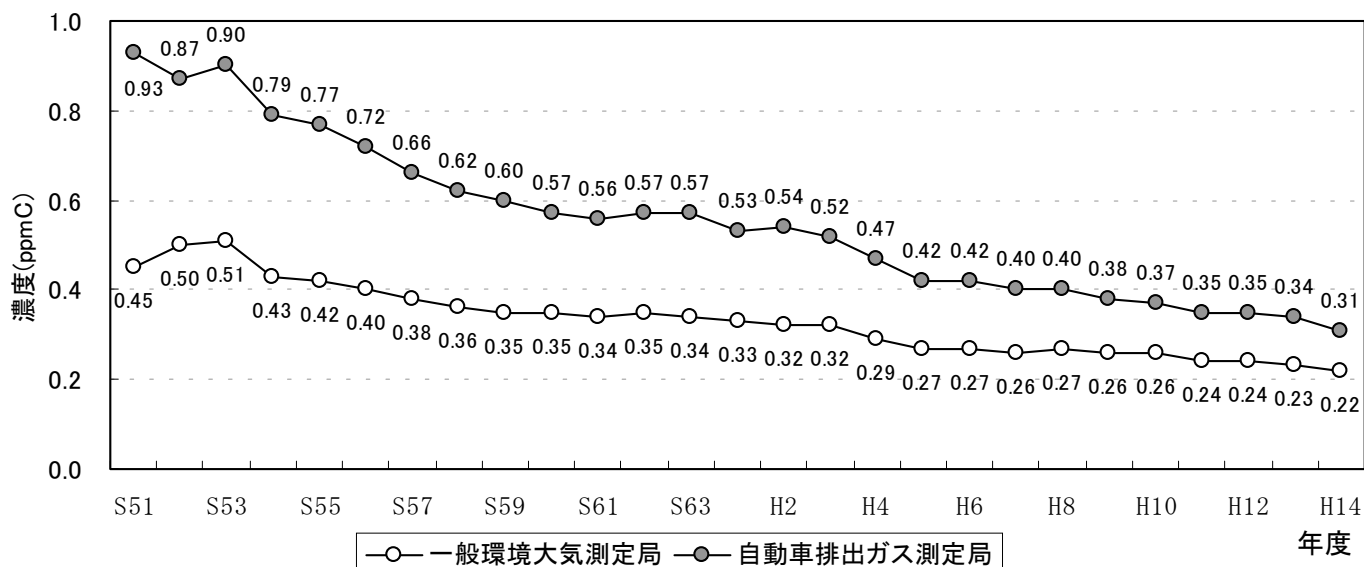


図3-6 非メタン炭化水素濃度(午前6時～9時の平均値)の推移